ウルトラジュニアサッカー大会（2･1年生大会）競技規則細則　改訂対比表	発行	2024年10月1日	1/3

条項No	改訂前	改訂後	改訂理由
（3） 交代	違反した場合は、･･･	当該反則により、競技人数以上でプレーに関与など著しくプレーに影響を与えた場合は、････	自由交代制により、選手の出入り自体は管理されなければならない。ウルトラジュニアサッカー大会は2人制の対面審判であり、専任の4th、補助審判はいないため、出入り時の声掛け･注意喚起はできないことから、交代する選手が出る前に、交代で入る選手がフィールドに入るケースは散見される。選手交代が懲戒罰対象と明文化される中で、懲戒罰の乱発防止として、より具体的な懲戒罰対象の事例を明記し、判定の公平性を保つ。
	－	ゴールキーパーの交代については、、事前に主審に通知した上で試合の停止中に入れ替わることができる。	ゴールキーパーの交代方法について、明記されていなかったことから、加筆し、明文化した。
	－	GKの交代時、GKは境界線の最も近い地点から競技のフィールドを離れなければならない。	試合時間が短いことから、交代による時間浪費を防止するために、加筆し明文化する。【競技規則　第3条　競技者】
	－	GKとFPが入れ替わる場合、主審に通知した上で、プレーの停止中に入れ替わることができる。インプレー中に主審の承認なしに入れ替わった場合、アウトオブプレーになった時点で両者に警告を与え、プレーを停止した位置から、間接フリーキックで再開する。	グラスルーツ年代の試合においては、戦術的な理由でGKとFPが入れ替わることがあることから、加筆し明文化する。【競技規則　第3条　競技者】
	－	ハーフタイムやPK戦の前などで主審の承認なしにGKとFPが入れ替わった場合、懲戒罰の適用はせず、大会本部へ報告すること。	
（6） フリーキック	ペナルティーエリア内の間接フリーキックは、最も近いペナルティーエリアのライン上から行う。	ペナルティーエリア内の間接フリーキックは、反則を犯した位置の最も近いペナルティーエリアのライン上から行う。	間接フリーキックの再開起点となる位置がどこからというところがわかりにくいため、反則を犯した位置を明文化した。
（7） キックイン	ボールがタッチラインを割った場合は、相手チームのキックインで再開する。	ボールがタッチラインを割った場合は、相手チームのキックインで再開する。キックインの際、相手競技者は、キックインの地点から2m以上離れること。反則の場合、警告を与え、間接フリーキックで再開する。	スローインに代わる再開方法として、キックインを採用しているが、キックイン再開の際に、相手競技者との距離が明確になっていなかった。キックインはフリーキックではないことから、スローイン時の競技規則（第１５条スローイン）を準用し、ボールと相手競技者との距離、反則時の取り扱い、再開方法を明文化した。
	キックインの際の助走は1歩（1m）までとする。	キックインの際の助走は1歩（1m）までとする。反則の場合、1回目は口頭で注意喚起を行い、キックインのやり直しで再開する。2回目以降、反則を繰り返した場合は、相手チームのキックインで再開する。	キックイン時の助走に関する競技規則の定めがある中、反則時の取り扱い、再開方法が明文化されていなかった。競技規則の公平な適用に向け、反則時の取り扱い、再開方法について明文化した。

条項No	改訂前	改訂後	改訂理由
（8） ゴールスロー	（8）ゴールキック	（8）ゴールスロー	ゴールキックでの再開ではないことから、条項項目名自体を変更する。
	攻撃側がゴールラインからボールを出した場合は、ペナルティエリア内からボールを手で投げ再開する。	相手チームが最後に触れたボールが自チーム側のゴールラインを越えた場合は、自陣のペナルティーエリア内からゴールスロー（ボールを手で投げる）で再開する。	解釈を簡便とするため、文言を見直し。
	ゴールスローからの直接のゴールインは得点と認める。	いかなる場合であっても、ゴールスローから相手のゴールに直接ゴールインした場合は得点を認めず、相手チームGKのゴールスローで再開する。	2023／2024競技規則 「第10条　試合結果の決定　得点」では、「ゴールキーパーが相手のゴールにボールを直接投げ入れた場合、ゴールキックが与えられる」となっている。本競技規則に準拠し、ゴールスローならびにキーパースローのいずれの場合においても、ゴールを認めることはなく、再開方法についても明文化した。
（9） ゴールキーパー	ゴールキーパーが保持したボールは手で投げること。	削除	インプレー中にゴールキーパーが保持したボールが、いかなる場合でもキーパースローしなければならないという誤解が生じる表現である。インプレー中にゴールキーパーが保持したボールは、パントキック以外の選択肢（スローまたは自らがドリブルすること）は認められており、誤ったプレーの認識にならないために削除する。
	パントキックは禁止とする。	パントキックは禁止とする。パントキックが行われた場合は、プレーを停止し、ゴールスローからやり直しとする。	誤ってパントキックを行ってしまった場合の反則時の取り扱い、再開方法を明文化した。
	－	キーパーがパントキックに類似した意図的なトリックプレー（近くにいるFPに向かってボールを落とし、FPに浮き球を蹴らせる行為など）を行った場合、相手チームに間接フリーキックが与えられる。ゴールキーパーが基点となって意図的にトリックプレーを企てたとして、ゴールキーパーに対し反スポーツ的行為として警告される。	競技規則12条　ファウルと不正行為　2項　間接フリーキックに準じた内容を適用する。パントキックを禁止とする本大会の主旨に背き、競技規則の裏をかいた反スポーツ的行為は、戦術と括ることはできず、厳しく対処する必要がある。当該反スポーツ的行為が生じた際の取り扱い、再開方法について明文化した。
	ゴールキーパーのキーパースローからの直接のゴールインは得点と認める。	いかなる場合であっても、キーパースローから相手のゴールに直接ゴールインした場合は得点を認めず、相手チームGKのゴールスローで再開する。	2023／2024競技規則 「第10条　試合結果の決定　得点」では、「ゴールキーパーが相手のゴールにボールを直接投げ入れた場合、ゴールキックが与えられる」となっている。本競技規則に準拠し、ゴールスローならびにキーパースローのいずれの場合においても、ゴールを認めることはなく、再開方法についても明文化した。

ウルトラジュニアサッカー大会（2・1年生大会）競技規則細則　改訂対比表			発行	2024年10月1日　3/3
条項No	改訂前	改訂後	改訂理由	
（9） ゴールキーパー	ゴールキーパーのキーパースローがハーフラインを越えても良い。	ゴールキーパーのゴールスローならびにキーパースローは、ハーフラインを越えても良い。	ゴールスローに関する取り扱いの記述がないため、加筆し、明確化した。	
	味方からのバックパスを手で扱った場合は相手側に間接フリーキックが与えられる。上記のファールがペナルティエリア内で行われゴールラインまで6mの距離が取れない場合は最も近いペナルティエリアライン上から行う。	味方からのバックパスを自陣のペナルティーエリア内で手で扱った場合は相手側に間接フリーキックが与えられる。間接フリーキックは、反則を犯した位置の最も近いペナルティーエリアライン上から行う。	（6）フリーキック（直接・間接）の間接フリーキックの再開方法と同様であるため、文言を整理した。本競技規則は、ゴールエリア内での間接フリーキックの再開方法を準用しているが、競技規則は最も近い『ゴールライン』と平行な『ゴールエリア』上での再開である。競技場はゴールラインはなく、ペナルティーエリアと同義で楕円形であり、最も近い『ゴールライン』の平行線は、位置が限定され、また、幅も3mと限定されることから、相互の公平性から反則位置の最も近いペナルティーエリアライン上とする。	
（10） コーナーキック	その再、相手競技者は5m以上離れなければならない。	その際、相手競技者はコーナーアークから5m以上離れなければならない。	間接フリーキックの再開起点となる位置がどこからというところがわかりにくいため、反則を犯した位置を明文化した。	
（11） PK戦	3人制で行う。3人で決しない場合はVゴール方式とする。	3人制で行う。3人で決しない場合は一方のチームが他方より多く得点するまで継続する。	現在はVゴール方式とは呼称しないことから、競技規則の文章に準用した表現に変更する。	
（12） その他	反則と不正行為は2022/2023年の日本サッカー協会の競技規則に準ずる。	本細則に定めのない競技規則・反則と不正行為については、大会要項が定める年度の日本サッカー協会競技規則に準ずる。	反則・不正行為以外にも競技規則に準じる内容があることから、表現見直し実施。	
競技場	－	競技場の寸法、呼称などを見直し。競技場の目安となる大きさは示し、競技会場の制約（施設として変更できない競技用ラインなど）により変更を加えることは可とする。	①競技場の制約でセンターサークルは半径3mの表現であったが、本来は半径5mが正しい。本来の数値を示した上で、会場となる競技場の制約を理由に変更可とする。 ②その他、各種ラインの呼称を追記。	
用語	－	ゴールスロー：相手チームが最後に触れたボールが自チーム側のゴールラインを越えた場合の再開方法 キーパースロー：キーパーがペナルティーエリア内で保持したボールを味方競技者へ手で投げる行為のこと	ゴールスローならびにキーパースローの用語が競技規則細則内で使い分けられている。ゴールスローはゴールキックと同義。キーパースローは、キーパーのボールの取り扱いの選択肢の一つとして、ドリブル、キックによるパスの他、手で投げるパスがあり、手で投げるパスがキーパースローであるため、明確化した。	